

子は親の鏡

ドロシー・ロー・ノルト著／石井千春訳

けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる

とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる

不安な気持ちで育てると、子どもも不安になる

「かわいそうな子だ」と言っていると、子どもは、

みじめな気持ちになる

子どもを馬鹿にすると、引つ込み思案になる

親が他人を羨んでばかりいると、

子どもも人を羨むようになる

叱りつけてばかりいると、

子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう

励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる

広い心で接すれば、キレる子にはならない

褒めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ

愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ

認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる

見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる

分かち合うことを教えてあげれば、

子どもは、思いやりを学ぶ

親が正直であれば、子どもは、

正直であることの大切さを知る

子どもにも公平であれば、子どもは、

正義感のある子に育つ

やさしく、思いやりを持って育てれば、

子どもは、やさしい子に育つ

守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ

和気あいあいとした家庭で育てば、

子どもは、この世はいいところだと思えるようになる

これは、一九五四年にドロシー・ロー・ノルトによって書かれた詩です。著者は、夫婦で自身の子どもを育てるかたわら、地域で子育てにかかわる講座を重ねてきました。

この詩は、新しく親になる何百万人という方々を中心に読まれ、子育て教室や教員セミナー、教会等でも活用されてきました。

一方で、時代とともに移りゆく、子どもをとりまく環境の変化に合わせて詩には手が加えられ、新しい行が追加されてきました。今ではこの詩が世界三七の国で翻訳され、多くの方によって読まれています。今回はこの詩に関する本のご紹介をします。

先日、書店でこの詩の内容について解説したドロシー・ロー・ノルトの著書「子どもが育つ魔法の言葉」を見つけました。私は、購入すると食い入る様に一気に読み進めました。そこには、日常の中でよく目にする光景の中で、親が子どもにどのような言葉で言葉をかけることが大切であるかが、事例とともに紹介されていました。自分の今までの行いを内省する貴重な機会となりました。

「子は親の鏡」・・・今ある子どもの姿・言動は私たち親・大人が関わってきた成果です。子どもは、大人のありのままを映し出す鏡であるということ。新たな年を迎え、いま一度、新しい気持ちで子どものかかわり方を考える、良い機会ではないでしょうか。

また、「親は子の鑑」という言葉も同時に頭に浮かぶ方もいらっしゃるでしょう。鑑・・・つまり手本・模範であらねばならない。この言葉の重みをかみしめて、目の前の子どもとよき時間を過ごしたいものです。

出典「子どもが育つ魔法の言葉」(PHP文庫)

ドロシー・ロー・ノルト／レイチャル・ハリス 著 石井千春訳

() 子ども支援コーディネーター 横井武志

